

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰数学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL・FAX 083(922)1218
http://www9.ocn.ne.jp/~shohukai/



松 門

還

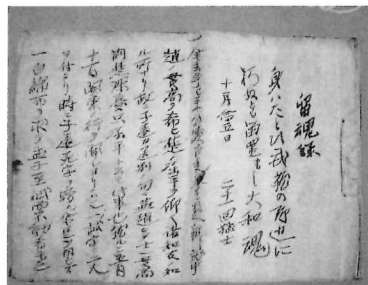
暦

— 松陰先生の言葉を要として —



拜謁庵 櫻井健一
(福岡県中間市在住)

神武天皇即位紀元二千六百六十八年閏年戊子平成二十年元旦、私は還暦を迎えた。還暦を所謂「起承転結」に譬えれば転の時であると思う。起で始まり、承でその心持を続け、転で気分を一転、結で結ぶこととなるが、今日までを起承で来て、転なる還暦の機は正に気分一転の時である。



今生にあつて「死とは何か」と自問せば、自答「未だ不明」である。しかし、転の次に来るべきは結即ち「死」である。「死」は何れか訪れる絶対。よつて、「生」なる今、畏れし「死」への探求を志す所以である。

吉田松陰「留魂録」に、「至誠にして動かさざる者は未だ之れ有らざる也の一句を書し、手巾へ縫ひ付け、携へて江戸に來り」と。これ、孟子の言を実践せんと意気。亦獄での課題ともいふべきものであつた。では、この課題とするものを、私自身の「死」に置き換えてみると、何を以てすべきであるか。

松尾芭蕉は「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」と発句。

魏の曹操は「老驥櫪に伏すとも志千里にあり、烈士暮年壯心止まず。」と賦した。

「九月十三夜陣中作」の名將上杉謙信は、戦に臨むに「死中

生有り生中生無し」を下げ知したと伝えられる。これ其々「生に殉ずる」を旨としていると考え

吉田松陰に高杉晋作が「先生、死とは如何!」と発した時、「死して不朽の見込あらばいつても死ぬべし。生きて大業の見込あらばいつても生くべし。」との応えであつたと聞く。これ実に、「死」に對峙するに指針となるべきものである。

『葉隠』に、「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。」亦、「常往死身になりて居る時は武道に自由を得」とある。

幕末の剣豪千葉周作は「山川の瀬々を流るる朽骸も実を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」と道歌した。この思想へのかかわりは左の和歌にもみることが出来る。

「あら樂し思ひは晴るる身は捨つる浮世の月にかかる雲なし 大石良雄」

「碎けてもたまとちる身は潔しかはらとともに世に在らんよ 真木和泉守」

これ、「捨生の思想」とも謂うべき、私の及ばざる覚悟にて、私の求める「死」解明の手がかかりとも考え、如何にしてこの心境に至ることが出来るか、今後の修業に資するべきものである。

留魂録「今日死ヲ決スルノ安心ハ四時ノ順環ニ於テ得ル所アリ」而して「人壽は定まりなし」と。

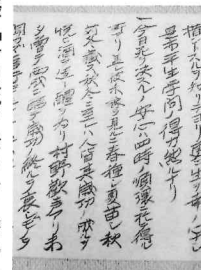
西郷南洲(西郷隆盛)「獄中有感」の一句には、「生死何ぞ疑はん天の附與(付与)なるを」とある。両者獄中に於て、斯くの如く。「死」の覚りに至つたものと信ずる。

「母の名をいまはのときに呼びつづけ百十歳の嫗みまかる 中村 東」

私は果してこの嫗の如き、死を視ること帰するが如くに、今際に臨むことが出来るであらうか。

今、私は「死」について明らかにすることは出来ないが、何時かこれを究めたいと念願する。今際の絶対満を持するたため、還暦以後を「余いかに生くべきか。」

平成の御代二十年元旦還暦に当たり、ここに「余生興起」を誓願し奉るもの也。
平成二十年元旦



吉田松陰と詩文

(全生命の発露)
その十代の漢詩

松陰先生の詩文に対する関心は如何だったのだろうか。塾生渡辺嵩蔵(天野清三郎)は大正5年7月8日聞取(『吉田松陰全集』10巻)で「先生の詩文を作らるる太だ早し。唐本を善く読まれたり」と。また昭和8年8月13日の聞取では「先生は風流がきらひ、書画もきらひであつた」と。

「松下村塾零話」(『吉田松陰全集』第10巻345頁)で門下生天野御民は「先生門人に作文勸奨せらるるなれども、詩作は強ひて励まされず蓋し文章を能くせざれば己の意を達すること能わずと云ふにあり。詩は多くは風流に属すればなり。曾て曰く「詩聖と称する杜子美(杜甫)の句に花ヲ穿ツノ蛺蝶(あげは蝶)深々トシテ見エ、水ニ点ズルノ蜻蛉(とんぼ)欸々トシテ飛ブと、是れ等の閑言をなすの暇なしと古人も云ひたることあり」と話されたり。」

松陰先生は門下生には文章はよく学んで熟達すべきと勧められたが詩歌はあまり賛成

ではな
かった
よう
であ
る。
福本
義亮氏
は「註

訓吉田松陰殉国詩歌集」(誠文堂新光社)に「松陰先生の詩は字句や語調の詩ではない。精神の詩であり情熱

の詩である。其純真なる心情が性霊から鳴り響き発して文句に現はれたものである。従つて気節の詩であり憂国の詩であり、大義の詩歌である。若し、それ詩なるものが其人の生命の旋律であり其人の感情の高潮であり其人の寂光であり、此等が自ずと声音に発し字句を通じて表現されるべきものなりとするなれば松陰先生の詩はまさに此等の総合であつて、松陰先生の全生命の発露である。然るが故に松陰先生の真の心情と真の精神とを十分真解するにあらざれば先生の詩歌の真解は到底出来ないのである」と。

山中新年
【詩訳】

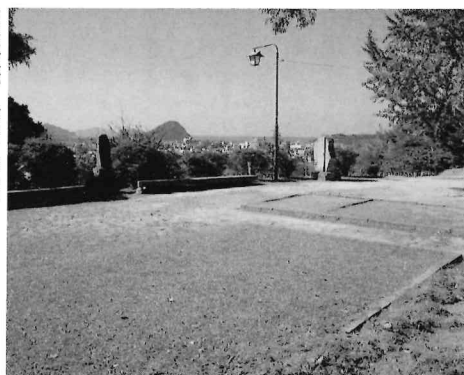
山中新年
朝市山林元不同
晏起東窓日已紅
柳催和風駘蕩裡
梅薰鶯語睨晚中
雪融門徑泥方滑
水解池窺水初通
吟人元來閑無事
且祝新年學一顰
隔籬何必呼隣翁
斯中自在有佳致

朝市・山林も同じからず、晏起(寝坊)すれば東窓日已に紅なり。柳は催す和風駘蕩(春ののどかな様)の裡、梅は薫る鶯語睨(玉をころがすような良い声)の中。雪融けて門徑泥まきに滑らかなり、水解けて池窺(池に引いた窺)水初めて通ず。吟人(詩人)元來閑にして事なし、且く新年を祝いて一顰(杯)を挙ぐ。籬を隔てて何ぞ必ずしも隣翁を呼ばん、斯の中自ずから佳(めでたい趣)致するなり。

萩城下と山林(松陰生誕の地・山屋敷)とは、もともと同じ事ではない。朝寝坊をして、東の窓は太陽が差している。柳は春の和やかな風の中で新芽が生え、梅の香りの中に鶯がよい声で鳴いている。雪が解けて門の道(徑)は泥が滑らかで、水が溶けて窺の水が流れ始めた。元來詩人(自分のこと)は静かで暇なものであり、新年を祝い祝杯を挙げ楽しむものである。生け垣を隔てた隣の老翁を呼ぶ必要もなく、この境地の中に自ずとめでたい趣向があるものである。

【解説】

現存する松陰先生の詩文で最も若い時代の作品である。



山屋敷跡(樹々亭跡)

土林真人(家学後見人)の家に下宿し勉強し、また玉木文之進主宰の松下村塾に学んでいた。しかし、常に山屋敷(生誕

弘化3年2月27日とあるので、松陰先生16歳である。藩

地の樹々亭)には行き来をし、一番落ち着く所であつたと思われる。

【出典】

「未忍焚稿」山中新年以下九首 弘化3年(1846)2月27日(『吉田松陰全集』第1巻50頁)
(山口県教育会発行「山口県教育」4月号に一部既掲載)

人日、山中の友人を訪ふ

【詩訳】

新年の余寒が厳しいために門を閉じているので、何処に行けば春らしさを感じるかわからない。この日は晴れていたので、約束通り頭巾を被り、竹の杖を持って家を出た。ところが黄楊は風に弄ばれて糸を繰るようで、初めて溪谷を出た鶯の音は実に滑らかである。よい景色が客を迎え、また客を送っている、直ぐに某居士の宅を訪ねたところ、既に自分より先にお客があることは愉快である。戸の傍に杖と履き物を置いて、中では談笑の声が聞こえてくる。座敷に通れば皆同士であつて団圓し、詩話文談に花が咲き実に興のあることである。そして清茶一杯に心情は融和し、初めて春らしい心地がしたところである。

人日、山中の友人を訪ふ（杉氏詩会の課題）

新年餘寒久掩門 新年余寒久しく門を掩じ、
不知何處着春魂 知らず、何れの処にか春魂を着けん。
此日好晴、幽約（閑雅な約束）を踏み、
角巾竹杖歩出郭 此の日好晴、幽約（閑雅な約束）を踏み、
弄黃偏輕縷風揚 角巾（角のある頭巾）竹杖歩して郭（城外にある町）を出ず。
放音始滑出谷鶯 弄（弄）黄（角のある頭巾）竹杖歩して郭（城外にある町）を出ず。
佳景迎客又送客 音を放つて始めて滑らかなり谷を出ずる鶯。
直到山中居士宅 佳景客を迎えまた客を送り、
自忻既有先吾人 直ちに山中居士の宅に到る。
戸留杖屨談聞 自ら悦ぶ、既に吾れに先だてて人あり、
入座團欒皆同士 戸に杖屨（つえとはきもの）を留めて咲談聞（さうだん）こゆ。
詩話文談多風致 座に入れば団欒（だんらん）皆同じ、
一鼎（茶釜）の清茶に交情融け 詩話文談、風致（おもむき）多し。

【解説】

弘化4年（1847）、松陰先生17歳（満年齢）の春の漢詩である。この頃既に明倫館において「武教全書」等を講義していた。（『吉田松陰全集』（定）第7巻12頁）玉本文之進主宰の「松下村塾」にも学んでいた。この年には、初めて萩から外へ出て湯田（山口市）へ旅をしている。また林真人から「大星目録」（山鹿流免許）を授けられている。

この詩は、玉木主宰塾生の仲間との詩会（杉家）で作られたものであろう。「弘化4年の春に同塾の門

下生久保清太郎・安田辰之助・浅野尚志・熊野忠恒・小野潔・吉田矩方（松陰）・妻木弥次郎・杉民治（松陰の兄）・深栖多門・斉藤貞甫等が団子岩の杉家に集まって詩会を催している。これらの詩も恐らくその当時のものである」（『訓註吉田松陰詩歌集』福本義亮著）

【出典】

「未焚稿」丁未詩稿弘化4年（1847）春夏、（『吉田松陰全集』第1巻201頁）
（山口県教育会発行「山口県教育」7月号に既掲載）

長崎に赴く途中の作

【詩訳】

四州（豊後、筑前、筑後、肥前）に聳える雲の上の山々を踏破して、長崎へ向かっている。到着したら、先ず第一にオランダ船を見物したい。どの駅も何事もなく通ってきただけは、太平の国恩による

長崎に赴く途中の作

踏破四州雲表山 踏み破る四州雲表の山
擬看萬里鳴蘭船 擬し見る萬里鳴蘭の船
笑他亭駅毫無礙 笑う他の亭駅毫無礙なきを
半是國恩半是錢 半ばは是れ国恩、半ばは是れ錢

ことであり、また一つは家（両親）からの金銭の援助によることである。

【解説】

松陰先生は、嘉永3年（1850、20歳）、8月25日、初めて長州（山口県）を離れ長崎・平戸への遊学の旅に出発した。同年12月29日帰国するまで、123日間の九州遊

学の旅を「西遊日記」にまとめている。その間の作詩を「西遊詩文」と題し、日記の付録として末尾に載せている。この詩はその最初の作品である。長崎到着の前日、9月4日の日記末に「是の日途中一詩を得」とあり、彼杵（千幡）大村（矢上）（長崎街道）の間に作詩したものである。

本文序「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり。（心は本来活きているものであり、活きているものには、必ず発

動するきつかけがある。そのきつかけは何かに触れることにより生まれ、感動することによって活動を開始するものである。発動のきつかけをつかむことこそ、あちこち広く旅行することによって得られる利益である）」（『吉田松陰全集』9巻25頁）は、旅行の意義をよく表している。

この旅の目的は、山鹿流宗家山鹿万助及び平戸藩老中葉山佐内に学び家学の山鹿流兵学を究めることであつた。

松陰先生は、平戸・長崎でアヘン戦争や海外事情・国防策などの新刊書を食べるようにように読み、また抄録した。また実際に外国船に乗ったり、パンを食べたりしている。また、熊本では宮部鼎蔵との出会いもあり、これからの生き方に大きな影響を与える旅であつた。

【出典】

「西遊日記」付録「西遊詩文」（『吉田松陰全集』第9巻88頁）
参考「吉田松陰語録集」（萩松朋会著・松風会発行）
（山口県教育会発行「山口県教育」8月号に既掲載）



長崎街道大村への道

第2回松陰先生に親しむ会

(第20回松陰教学研究会) 講義

武士道に則った松下村塾の教育

松風会理事 折本 章

1 はじめに

(1) 家庭教育こそ人格形成の大本

① 孝は萬徳の根源。孝に根差さない徳は本物に非ず。

肉親に対してのみ尽す閉鎖的・表面的な孝は、小孝にして真の孝ではない。真の孝である大孝には、波及性があり限らない広がっていく。松陰も「孝にして忠ならざるは真の孝に非ず」と説いている。忠に行き着かないような孝は、孝の名に値しない。身近な親を真実に愛し、心から敬してこそ、他人をも敬愛できるようにになる。真の孝子は、貧困を味わい、苦勞を分かち合う体験をさせた家庭から生まれる。

松陰の実家である杉家は、貧困ではあるが教育的風土に富み、肥沃な土壌であった。松陰はそうした土壌に育ち、大地に根深くしっかりと根を張った大樹となった。干ばつ、冷害、台風に遭遇しても微動

だにしなかった。それに比べ今日の若者は、殺伐としたやせ地に浅く狭く根を張り、ひ弱な細長い樹木となつていく。従つて、冷害や害虫などに侵されるとたちまち萎れて枯死してしまう。

講義中の折本氏



② 愛情の表れ方。盲目的な溺愛・姑息な愛と智慧に照らされた理性的愛。

慈と厳をうまく調和した愛こそ本物である。溺愛や姑息

の愛は、とかく表面的でその場逃れのへつらいに終わる。杉家にはこうした子供の機嫌を取るような姑息な愛の片鱗もなく、智慧によって高められた慈厳兼備の理性的愛があるのみであった。不義や公に背くような行為は厳しく叱正したが、絶望の際における癒しと励ましにも深い心を用いた。松陰には背徳行為などなかったが故に、家族は松陰の善なる心を信じぬいた。

③ 憂慮すべき今日の家庭・学校教育。松陰は「橋本」左内を起して一議を發せんとするが、留魂録に書き残しているが、松陰を起して今の世を論じてみたいものだ。利得を享受する権利ばかり主張し、規律や節度のない自由が横行する世にどんな警告を發するだろうか。恐らく書を読んで見識を高め、士規七則を座右の銘として生きよ、といった意味のことを教戒するであろう。

政界には、公を役して私に殉ずる実情を見て、私を役して公に殉ぜよ、と教戒するであろう。公の立場を利用して徒に私腹を肥やすことは、人間として恥すべきの至りである。我が身を粉にして公のために尽せよ、と警告するに違

いない。

現在人は、見識が衰退し無気力で根気がなく体力もない。事が思うようにいかない。他人に責任を転嫁し、自らを省みる発想を持たない。天は男女それぞれに特性を与えてこの世に送り出した。天の意思に反した「らしさの喪失」は、人間らしさの喪失につながる。「らしさ」は強制や義務で行われる類のものではなく、自然に無意識のうちに行われるべきものである。そうした天意の「らしさ」を歪める男女の平等など、悪平等の最たるものである。

(2) 機能的学力こそ生きる力につながる

① 教育とは学習内容を忘れてしまった後に何を残すかという事業である。

教えた内容は、やがて忘れることを前提としなければならぬ。ならば何を残すかを考えなければならぬ。それは機能的学力と言われる、学習の意欲・方法・態度、志、自己教育力などである。こうした学力が育てれば、将来の発展がいに期待される。教育は考え方が育ち、人間が育ち、能力が伸び、志が育ていくところに真義がある。そのためには、師の感化

が重要な役割を果たす。

② 学問の基盤である国語力の低下。不勉強、本を読まない、楽志向。

国語力・読解力はすべての教科の基本になる。漫画やゲームなど断片的な短文に明け暮れ、長文をじっくりと読むことが非常に少なくなった。松下村塾では、常に「君ならどうするか」という問い掛けをし、塾生は頭が痛くなるほどであったと述懐している。現在人は思考することを面倒がり、常に楽な方へと流れる。このため、本当の学力が身に付かず、断片的な知識ばかりが増える。

(3) 尊師との出会が人生を変える

① 師二十一回猛士に謁し、始めて書を読み道を行ふの理を知る(高杉)。

晋作は幼少より無頼にして撃剣を好み、一流の武人になりたいと思っていた。また博学、文章家になつて天下にその名を轟かせたいという強い自己顕示欲を抱いていた。しかし、本心で晋作が学びたかった内容と松陰が教えたかった内容とが見事に一致し、大きな教育力を生み出した。師弟共々その道を得たりという

ことになった。

それまで平穩無難を願う頑迷な家族は松下村塾への入門を快く思わなかった。孝道を選ぶか、真の学問を選ぶか、二者択一を迫られた晋作は、両者の間に挟まって大いに葛藤した。孝道を選んで俗人になり下がら、無為な生涯を送ることだけは断じてしたくなかった。真の学問を選ぶことは、一時的には親に背いても、それは真の孝に至る仮の姿であり、やがて己を成して大孝を立てて親を顕すことこそ真の孝である。

②松陰と素行・象山、坂本龍馬と河田小龍・勝海舟。熊沢蕃山と中江藤樹。

富や権力に弱い人は、そういう人の前に出ると、震えたり、顔がこわばったり、無闇にへつらったりする。礼儀を失わないようにしながら、ごく自然に触れ合える人間は、それだけ豊かな人間力を蓄えている。松陰も、龍馬も、蕃山も、師に対して必要以上にへつらうことなく、同じ人間同士と交わった。

人は尊敬する師を得るか得ないかで、人間としての豊かさや大きさが変わってくる。自分も師のようになりたいたい、師を追慕しながら大きく

成長していく。三人も畏敬する師と巡り合わなかったならば、その人生も方向を異にしていたかもしれない。真に学びたいことがあつて弟子となり、真に教えたいことがあつて師となった。ここに大きな教育効果を上げることができたといえる。

(4) 武士道とは

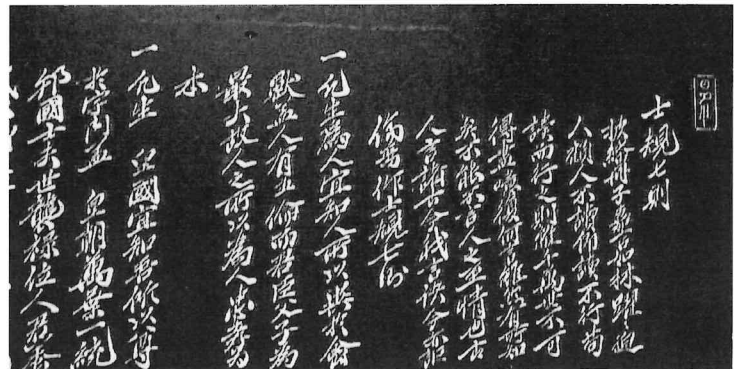
①武人の精神的バックボーンを形成。

武士道は武士の倫理観の掟であり道徳原理である。この武士道の死守こそが、武士たる者の品格である。従って、武士は恐れられ怖がられる存在ではなく、信頼され頼られる存在でなければならぬ。つまり、仁・義・礼・智・信の5常を実践者としてこそ真の武士といえるのである。

②士規七則。

「凡そ生れて人たらば、宜しく人の禽獣に異る所以を知るべし。蓋し人には五倫あり；故に人の人たる所以は忠孝を本と為す（人間的自覚）凡そ皇国に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし（国民的自覚）」

士の道は義より大なるはなし。士の行は質実欺かざるを以て要と為す（武士的自覚）」



・義・羊（美、善）十我・我を価値あらしめる。善美に叶った価値ある行為。

・日本には恥の文化があつた。しかし、その文化が失われ、名利・私欲の追求に歯止めがからなくなった。

③武教小学序

「士道と云ふは、無礼無法、粗暴狂悖の偏武にても済まず、記誦詞章、浮華文柔の偏文にても済まず、真武真文を学び、身を修めて心を正しうして、国を治め天下を平らかに

にすること、是れ士道なり。」

・農工商三民の長たるに恥じない職務を追究しなければ士たるに値しない。

「悪衣悪食を恥じ、居の安きを求むるは則ち士に非ず。身に道徳の重きを任じ、心に仁義の樂しみを甘んず。これ真の武士なり。」

・私を役して公に殉う者を大人、公を役して私に殉う者を小人。

・花は桜、人は武士。潔く散る桜と未練がましい薔薇の対比。素行・赤穂義士の潔さ。

④家族や地域の絆が卑怯、臆病、非情、挫折、不義を排斥し勇士を育てた。

・武士の腰の刀は自尊心、責任感を表し、心中に秘める忠誠と名譽を象徴していた。

・この精神を失った現代人は、他人の痛み、苦しみが解らず、自分の苦難に耐えられない。

・憐れみの情薄く責任を転嫁して他人を責める。卑怯と非難されても琴線に響かない。

2 教育者たる先天的・後天的資質

(1)学問によって磨かれた高い見識と高潔な人格

①凡百の教師論の帰一すべき方向。

・師道の何たるかを我々に示

してくれる最良の手法。学問によって磨かれた高い見識と高潔な人格は、教師にとって必須の条件である。

・人を射るが如く炯々とした眼光であるが、少しも尊大な処がなく、親切で礼儀正しい。

(2)性の善なるを篤心し疑心がない

①先ず美点が目飛び込む。

「余寧ろ人を信ずるに失するとも、誓つて人を疑うに失することならんことを欲す。」

②不善不正に至りても、その由りて起る所は仁に非ざるはなし。

人心の根本を尋ね出せば、仁の一字に尽きる。ならば暴客が人を殺すも仁であるか？物を盗むも義であるか？人を殺すのは不尽であるが、殺すの心は必ず仁である。愛する所がなければ悪む所もなく、殺すことない。盗を働くもその心は義である。何故ならば飢餓にあえぐ妻子を救わんとして敢えて盗みを働くからである。

(3)燃える情熱、行動力、洞察力

①人材養成、発掘、抜擢などを通して、優秀な人材を浮上

させる風潮があつた。

②毀譽褒貶を念頭に置かない
勇猛心と行動力。
・虚飾を拝したあるがままの
人格を、いづどこでも誰にで
もぶつける事ができた。

③弟子の心を揺さぶることの
できない教師は失格である。
・弟子として師を突き上げ変
えていくことのできない者も
失格である。

(4) 平等な人間観と人間愛を
内蔵
・宮番幸吉の妻登和を宿泊さ
せ、その碑文を書く。
・塾生の出自や貧困生への思
いやり。滞囚の免獄運動。女
子教育の力説。
・士農工商は職業上の区分で
人間的区分ではない。



登波の碑 (下関市豊北町)

(5) 大和魂に照らして行動
①大和魂とは、義や理性、魂
の声、天の声に従う止むに止

まれぬ強大な心。

・彼は野に放てば虎である。
不正があれば断じて許さず、
不義が起これば断固として戦
う。教育者として静かに後進
に学を講ずる性質の人ではな
い(奈良本辰也著)。

②二十一回の猛を為すゝ猛と
は止むことのできない誠。
「杉の字にも、吉田の字に
も二十一回の象あり。吾が名
は寅、寅は虎に属す。虎の徳
は猛なり。吾れ卑微にして孱
弱、虎の猛を以て師と為すに
非ずんば、安んぞ士たること
を得ん。…終に其の遂ぐる能
はざらんことを懼れる。」

(6) 師を自任せず子弟の中に
生きる

①師たるを超越して悦楽の境
地に到達し、教育の妙味が体
内にみなぎっていた。

「書を読み且つ抄し、或は
感じて泣き、或は喜びて躍り、
自ら已むこと能はず。此の樂
しみ中々他に比較すべきもの
あるを覚えず。」

②相手の心を揺さぶり、魂に
働き掛ける↓不朽の教育者た
る所以である。

③師たる面子に拘らず、弟子
に詫び教えずら請うた。

・思うに任せない天野清三郎
の教育を高杉に依頼する。

3 教育・学問の姿勢

(1) 求めた学問的態度

①修己治人の学ゝ学は人たる
所以を学なり。

聖学の主とする所も、修己
治人の二途に過ぎない。聖賢
の己を修むると民を救うと
は、別個のものではない。両
全にして初めて完結する。自
己を真実にし、他人との関係
を正していく修己は治人の
本、経世済民たる治人はその
必然的効能である。

・誠心道を求むるは上なり、
名利のためにするは下なり。

・掘井求道ゝ井戸を掘るのは
水を得るため、学問をするの
は道を得るため。水を得な
ければ井戸ではないように、
道を得なければ学問をしたこ
とにならない。

・江戸の師は書物の講釈はす
るが、我が人生の行く手を照
らしてくれる人はいない。
・己が為にするは君子の学、
人の為にするは小人の学であ
る。

②実行・実用の学ゝ考えを文
章にまとめてみる。人に話し
てみる。

③公のための学ゝ国恩に報じ

国家のためにする志・誠が学
問の根本。

・地道に家業に励み、天下国
家に熱い思いを寄せる有為な
人材を育てようとした。公に
殉ずる大人と私に殉ずる小
人。

④覚悟の学ゝ吾れを死地に措
かんとするを知りてより更に
生を幸ふの心なし。是れ亦平
生学問の得力然るなり

・知行合一ゝ学問を積みばと
かく觀念に走り、実行が伴わ
ず決断力、胆力に乏しくなる。
優柔不断にして覚悟がなくな
る。

・名利の学は覚悟に乏しくな
る。若し死に分毫の憾みあら
ば、是れ学問に分毫の徹せざ
るものあるなり。

⑤間断なき学ゝ学問の大禁忌
は作輟なり。

「学と云ふものは進まざれ
ば必ず退く。故に日に進み、
月に漸み、遂に死すとも悔ゆ
ることなくして、始めて学と
云ふべし。善の善に至らざる
は熟の一字を欠く故なり。」

「岡田耕作10歳が正月2日
に学を請う。士氣とみに弛み、
来たりて業を請う者を見ず。
天下危急に際し何ぞ除新あら
んや。」油源に糸を垂れて燃
え続ける松陰の姿勢。

(2) 戒めた学問的態度

①詩文に淫する態度ゝ詩文書
画に耽り、珍奇な骨董品を弄
ぶ。

・文芸的趣味的生活を墮落と
して排斥したが、後には寛大
になつてゐる。物を弄んで志
を失う。人間を高め有用にす
る方向に掘り下げない。

②名利のための学問ゝ名利が
目的、学問がその手段になる。
・人爵と天爵。「人爵たる名や
官位を得んがために始めた学
問は、進めば進むほど弊害が
現れる。遂には天爵をも失う。
風評の事実に過ぎるを恥じ
る。」自分を他と区別する尊
大な態度に恐るべき人間的墮
落が潜む。

③顧問の学ゝ生命の中心を揺
り動かし得る生きた知恵を伴
わない。自己満足。

・自らを真実にするための学
問ではなく、弱点を弁舌で防
ぎ、他の批判、攻略を説き伏
せるための論理的武装手段と
しての学問。他人の疑問に答
えて自己を誇示する辞書的学
問。学問と人生は分離し、人
の本質は窒息、墮落する。

④卑屈の学ゝ漢書を読み漢
土を羨み、自国を忘れその美
点を疎かにする。

・外国崇拝は卑屈な学問の所産。逆に排外的独断主義は認識不足か傲慢に基づく。

・身分高きは傲慢にならず、低きは卑屈にならずして、初めて真の議論が成立する。

4 村塾教育の理念と実践

(一)入・退塾、経費、日課など

①入塾・退塾 松陰の人物と見識に敬服した友人知己が師事を勧める。

・僧月性が赤根武人、増野徳民らに入塾を勧め、宮部鼎蔵は久坂玄瑞に入塾を勧めている。

・門田吉勝は父の反対に遭い、入塾を残念した。入塾自体が難関の突破。

「往く者は追はず、然れども其の前日の善美を忘るることなかれ。来る者は拒まず、」

②経費 銘々随意に任す。

・「月謝会費ありしや」と尋ねられた天野清三郎は、「却って食事の御馳走になることもあった。寄宿生には食費を払っていた者もあったようだ」と答えている。品祖な弁当の品川や持参しない者には分け与えたという。

③授業 教卓なく、時間割、教材、出席者もばらばら。

・四六時中、誰が何時とはなしにやって来るのだから、その対応は大変であろう。現代ではとても出来ない業である。



松下村塾

(2)規則と塾風

①諸生に示す 礼法規則などで人を変える事はできない。

・「村塾礼法を寛略し、規則を擺落するも、ただ今世礼法の末造、流れて虚偽刻薄となれるを以て、誠朴忠実以て之れを矯揉せんとするのみ。：気類先づ接し義理従って融る。区々たる礼法規則の能く及ぶ所に非ざるなり。」

②陋村と雖も、誓って神国の幹とならん。

「松下は城の東方にあり。東方を震と為す。震は万物の出づる所、又奮発震動の象あり。故に吾れ謂へらく、萩城の將に大いに頭はれんとするや、其れ必ず松本の邑より始まらんかと。」

(3)個性の伸長に徹する暗示的教育 名字説

①個性について。

・師の力を借りず環境の影響を受けない存在の個性と、教学によつて純化され高められた価値的個性。天賦の性を純化していくならば、人は誰でも聖人になれると確信していた。純化されない存在の個性は短所となる。

②人各々能あり不能あり性はみな異なる。

・一律を執つて万人を議し、己を以て人を論ずるのは個性を無視。人間全体の才能を競うことなど全く不可能だ。人間は得意な部分を競うことにより、自分を発見し生き甲斐を感じる。才能が生かされ、それに向かつて生きるとき、人間の本領が発揮される。

・名字説は個性を見抜き、伸長すべき方向を頭に描きながら慎重に選定した。

・意欲と発奮に点火し、その燃え上がり静かに待った。

「意欲を掻き立て、魂を躍動させ、走り出さずにはおれない世界に塾生を追い込んだ」

③村塾の双壁・高杉晋作と久坂玄瑞

「余嘗て玄瑞を挙げて、以て暢夫を抑ふ。暢夫心甚だ服せざりき。未だ幾ばくならずして、暢夫の学業暴かに長じ、議論益々卓く、同志皆為に襟を斂む。」頑強で我儘な晋作には、外から圧力を掛けたのでは逆効果であり、松陰の深い教育は晋作の闇を照らす光明となった。

・採長補短 純化されない才能や性格は短所となる。学問は須らく己が真骨頂(存在の個性)を求得し、然る後工夫(価値的個性)を凝らすべきである。

・与える者と求める者の人格が、激しくぶつかり合うところに大きな教育効果が生ずる。

(4)時代に即応した教育

①時代の変化に対応する能力の育成 書は古、為は今なり。

・久坂玄瑞宛書簡 往昔の死例を執りて、以て今日の活変を制せんと欲す。思慮の粗浅とは是なり。自らの立場から論を起こさずして、傲然天下の大計を以て言と為す。議論

の浮泛とは是れなり。
・現実やその場の情景を頭に浮かべながら、自然に湧き起こる本物の感情を露わにして教える教育。

②感銘した言葉は抄録する 読書の半分は抄録に用いよ。

・今年の抄は明年の愚となり、明年の録は明後年の拙を覚ゆばし。 学問が進歩した証。

(5)自己教育力の育成

①自己教育を間断なく孜々として推進し得る気力、能力、意欲、方法。

・蓄積された実態的学力よりも、学びの基となる機能的学力を重視し、必要な知識を求めて生涯学び続け、自分の可能性を自分で伸ばす人間を育成した。

②生涯学習の重視

「少にして学べば則ち壮にして為す事あり。壮にして学べば則ち老いて衰えず。老いて学べば則ち死して朽ちず。」(佐藤一斎)

「己が為にするは君子の学、人の為にするは小人の学。」

(6)気迫、志、主体性の重視

①志と気迫蓄積 松陰と晋作の対照性。

・師たる松陰は隠忍自重して

エネルギーを放出せずに気迫を濃縮させ、弟たる晋作は酒色などでエネルギーを放出させて気迫の基とした。

「志は気の帥、気は志の隸、志定まれば氣壯なり。」迫力の筆もつた文は、松陰その人の複写であった。

・行動を引き出さない思想は思想の名に値しない。
・闘争性、反発性、野心、自尊心などは気迫の根源。

②主体性・華夷弁別愛国の情。
・自国を他国よりも優れたものとして愛する「華夷弁別愛国の情」を重視し、独りの自主独立が国家の独立につながるとした。

・情欲に左右されない卓然自立の人を育てる。身体的欲望(私)を精神(公)に従属させるよう努めた。
・華美贅沢を排し儉約を奨励、巧言令色を戒め剛毅朴訥を目指した。

・度重なる蹉跌に挫折することなく、蹉跌よって益々志を強固にした。

(7)人間尊重に徹する
①人間を差別せず労わる精神。
・士農工商は職業上の区分であって人間的差別ではない。
・女子教育の重視、一身を挺

した免獄運動の展開。

「人命は至つて重し。一人も十人も百人も皆同じ。吾れ今一身を顧みて野山の事を顧みずんば、囚徒十一人遂にまさに天日を見ずして死すべきのみ。一人を以て十一人に替へば、吾れ亦固より其の身を顧みざるに足るなり」

②士分は傲慢、足軽以下は卑屈では、同胞一体の雰囲気は醸し出されない。

③君公を補佐する大臣を選ぶ際の心得。
・「一門家老・貴族に人なくんば、これを寄組に取る、大組に、徒士・足軽に、農工商に取るも不可あるなし」(狂夫の言)



野山獄跡

(8)勤労教育

①学問と勤労を両輪・観念のみ膨らみ不実行となるを戒める。

・産学並行を重んじたことは、松下村塾の床柱に掲げられた「万巻の書を云々、一己の労を云々」によく表れている。

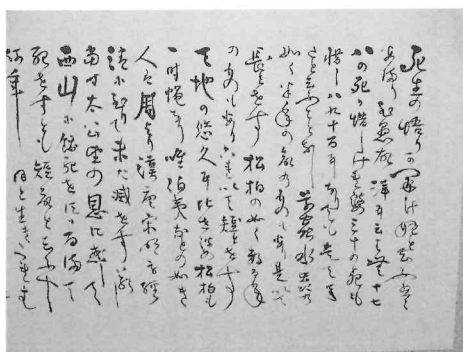
②学問で悟り得た道理を実現する所に人生の意義を見いだし、安心立命に達した。

③働く事、身体を動かす事、汗を流すことが、人間に快い充実感を与え、人間を豊かに大きく成長させる。・手伝いは子供の成長を促し、人生を理解させ、家族との運命一体感を育む。子供を溺愛しお客扱いし、子供に諄う教育は最低。家庭内暴力はこうした子供が起す。

(9)文筆による教化・暗示的教育
①送叙、名字説、書簡など。

・意欲や主体性を掻き立て、内面的覚醒を図る。
「杉蔵往け。月白く風清し、飄然馬に上りて：今日の事誠に急なり。然れども天下は大物なり、一朝憤激の能く動かす所に非ず。其れ唯だ積誠之れを動かし、然る後動くあるのみ。」

②門人は書簡や詩文を送って教えを請う。
・高杉晋作の質問「丈夫の死すべき処如何、僕今日の所為如何にして可ならん。諸侯処し様如何」に対して、獄中から「死は好むべきにも非ず、亦悪むべきにも非ず、道尽き心安んずる、便ち是れ死所、生きて大業の見込みあらばいつでも生くべし」という明快な書簡を送っている。これが晋作の死生観に大きな影響を及ぼした。



明治26年3月 松陰先生の遺訓を品川弥二郎本人が書す

・品川弥二郎の「死生の悟りが開けぬ」という訴えに対して、齢わずか16、7歳の少年に対する内容とは思えぬ厳し

い訓戒を与えている。

「死生の悟りが開けぬというは余りに至愚故、詳かに云はん。17、8の死が惜しければ、30の死も惜しし。：人間僅か50年、人生70古来希、何か腹のいえる様な事を遣つて死なねば成仏は出来ぬぞ。：足下輩も其の(あさましき)仲間なり」。読み終わった瞬間、弥二郎は激憤して書簡を破り捨てたが、冷静になつて思い返し、これをつぎ合わせて修復した。

・徳、字は有隣の説「抑々吾れ君の状貌を相るに、獄に死する者に非ず、徳を修めて隣を得ば、亦以て事を成すべし、是れ君に在り。」これに対し、頑強な有隣も「味あるかな言や、吾れ未だこれを前に聞かず」と応じている。

・藩主がしょんぼりしているので、側近が「殿、お具合で悪うございますか」と尋ねると、藩主は「どこも悪くはない。ただ、今日は松陰の49日(12月16日)であるに、弔い致す者も希で、さぞ寂しく眠っているだろうと思うてのう」と答え、側近の者は姿勢を改め藩主を仰ぎ見ることができなかつたという。

第7回松陰研修塾基礎コース2年次3回目

長崎街道・平戸街道・平戸市探訪報告

日程・コース

10月20日(土) 参加者15名

6..30 山口県教育会館出発、7..05 新山口駅前經由、10..00 長崎街道神埼宿着(神崎市神崎町神崎)、13..30 佐賀城資料博物館、16..00 肥前街道早岐宿、19..00 平戸市宿泊、21日(日) 8..00 平戸観光資料館、8..30 松浦資料館、吉田松陰宿泊地紙屋跡、葉山佐内墓地、港

神埼宿

執行真知子氏(神崎市文化財観光専門員)の案内で神埼宿を歩く。

松陰は、初めての藩外遊歴で嘉永3年(1850)8月25日萩を出発し、9月2日神埼宿を通過している。松陰が通ったであろうところを探访する。



神埼宿

神埼宿は明治7年の佐賀の乱で全ての建物が焼失し、現存する古い建物もそれ以後に建てられたものである。

櫛田宮

「今より1900年前頃、景行天皇が当地の荒ぶる神を和平したときに創祀され、皇室神埼莊園の総鎮守と崇敬されてきた神社で、神埼宿場の真ん中に位置している。農業神、厄除神として信仰を集め、朝廷、武將の尊信も厚く、社領の寄進や社殿造営が、しばしば行われた。」(『長崎街道2 肥前佐賀道』図書出版のぶえ工房より)

境内は4000坪、3000坪の池、弁財天社・稻荷神社、相撲場・肥前鳥居・絵馬・大砲等があり、大木に蔽われている。旅人は必ずお参りし休憩したであろうと思われる。現在の市役所も櫛田宮の敷地

内にあるそうである。



櫛田宮

ひのはしら一里塚

大型バスが街道を通ることができないので、市役所から徒歩で1.5kmを歩く。長崎街道



ひのはしら一里塚

で一里塚が残っているのはここだけである。思ったより大きく頂上に地蔵様が祀られているそう。また塚の左側には観音堂があり、木製の観音様が鎮座していた。ここに櫛田宮の赤鳥居が建っていたので「ひのはしら」と呼ばれ、神域であることが残存した大きな要因となったようである。

鍵型の道

宿内に5箇所の曲がり角がある。この道は室町時代に開かれたので戦時体制を考慮し通し矢を避けるためである。

高札場跡

櫛田宮前に建つ高札は木製で、その寸法は厚さ1寸の板で、縦1尺5寸、横6尺と立派なものであったと言われる。



神埼宿高札場跡

石垣の土塁の上にあったと記録にはあるが、何ら痕跡はない。

佐賀宿

松陰は神埼宿と同じく嘉永3年9月2日に通過している。

「佐嘉(佐賀のこと。明治2年から佐賀となる)に至る。往還の童子、多くは書を挟み袴を着けて過ぐ、実に文武兼備の邦とみゆ。肥前人は剛直にして精神凝定す。」(『西遊日記』)途中武富文之助(佐賀藩士。初め中村嘉田に就いて学び、後江戸に出て古賀洞庵の門に入る。帰国後弘道館の教授となる。諸生を教導すること25年の長きに及ぶ。『吉田松陰全集第10巻、関係人物略伝』を訪ねたが会うことが出来なかった。しかし、帰途、同年12月21日から24日まで佐賀へ滞在し武富文之助・千住大之助・中山平四郎へ会うことができた。今回は街道を探访せず、佐賀城址の本丸歴史館(佐賀10代藩主鍋島正直が天保期に再建した佐賀城本丸御殿の一部を忠実に復元したもの)を訪れる。復元された建物及び展示されている資料から幕末・維新期の佐賀、明治維新の佐賀の群像等を学ぶことができた。

早岐宿

早岐宿は平戸街道では唯一の、最も徹底した鍵型道路を採用した城下町そっくりの道路政策の干拓地（早岐町田原新田）である。長崎街道の小倉宿・佐賀宿に次ぐ典型的な鍵型道路で、大村氏・鍋島氏に対する防衛的な必要性があったのである。（『伊能忠敬と平戸街道』図書出版のぶえ工房）



早岐宿一里塚跡

古い資料をみると早岐の町はかつては海で江戸時代に干拓されたものである。平戸の町も街道も干拓地の上にある。私達はガイドなしで、地図を頼りに平戸街道を南から北に向かって（佐世保方面）約1・5 km歩いた。早岐駅（JR駅）前にバスから降り立ち、

県道を横切り平戸街道に入っ



早岐宿石畳



早岐宿 松陰宿泊地跡

一里塚跡の石碑、吉田松陰宿泊地（小松屋）跡、鍵道路、石畳の残っている往還、本陣跡、脇本陣跡、狭く急な坂道

（徳丸道路）を通り、切り通し（国道・鉄道）の上に渡した高くて長い陸橋を渡って山道に入るところで平戸街道を



早岐宿本陣跡

終わりにした。かつての遺跡は殆どなく、本陣の門や土塀、石畳が残っているのみであったが、松陰が宿泊したであろう土地を歩いたことはそれだけで感動を感じる。

平戸市

松陰は嘉永3年（1850）9月14日から11月6日まで52日滞在し葉山佐内（松浦藩家老、号を鑑軒）・山鹿高紹（平戸山鹿平馬家、平馬（義都）の五男、宗家山鹿家9代を継ぐ）に学ぶ。多くの書物を読破し、また抄述し、ある時は藩士の夜学会に臨み経学

を講じた。また海外事情や砲術を豊島権平に学び、大いに啓発されたのである。

「…又肥前平戸に遊び、彼の藩風を観るに、流石に海中の孤島なるを以て、士人大抵漁舟一隻持たざる者なし。又沖漁をせざる者なし。葉山佐内と云ふ人などは彼の藩にても碌も重く班も崇く、且つ年齢も六十有余の人なれども、官府に登る時は必ず騎馬なり。又毎々沖漁をなせり。常に余（松陰）に謂う『馬と舟とは久しく廃すると物前の用を欠くことある者なり』と。是を以て藩風を知るべし。…」（『吉田松陰全集』第4巻 p39）

平戸観光資料館

山鹿宗家14代の山鹿素子氏が経営されている資料館。直



平戸観光資料館山鹿素子氏

接本人から説明を受ける。ここで山鹿素行や松陰に関係ある品では、文書「誓言前書之事（レプリカ）」（貞享元年8月23日、浅野長矩（内匠頭、忠臣蔵で有名）・長広（大学、長矩の弟）が山鹿素行の山鹿流兵法の門弟となる誓約書）、松陰の山鹿萬助への「誓約書（レプリカ）」を見ることができた。その他多くの資料は南蛮文化・切支丹に関するものであった。

松浦史料博物館

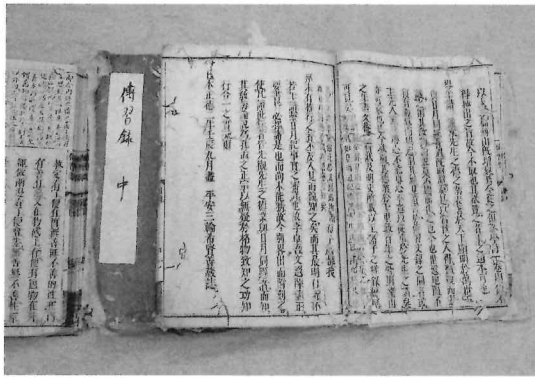
「この地は鎌倉時代初頭平戸松浦氏発祥の地であり、南朝の忠臣松浦鬼八郎定はここより起こりました。また日本最初の蘭英貿易を平戸に独占した松浦邸跡であり、蘭英商館長ウィリアム・アダムス等も出入りした所です。」



松陰持参の萩焼（松浦資料館蔵）

松陰が抄述した「伝習録」

高い石垣と白塀は安土城法によって築かれています。現建築物は廃藩後、明治26年に松浦氏の住まいとして再建さ



れたもので、そのまま博物館に利用し、展示場は当時謁見の間、中心に設けられています。昭和30年松浦隆氏の寄贈により財団法人登録博物館として発足した。」とパンフレットにある。この博物館には、建武の中興に当たり朝廷より賜ったもの、松浦党活動時代のもの、戦国時代以後の武器・武具、西欧貿易時代のもの、平戸キリシタン関係、江戸時代大名調度品、その他焼き物等数多くが展示されている。

平戸探訪の指導者としてこの博物館の学芸員久家孝史氏にお世話になった。久家氏から特別に、所蔵庫に案内され、松陰が持参したと伝えられる萩焼、松陰が葉山佐内から借りて書き写した『伝習録上・中・下』（王陽明著、江戸時代中頃に木版されたもの）を見ることで、皆大いに感激した。

「10月23日、伝習録上・中を抄録。10月24日、伝習録下を抄録」『西遊日記』全集9巻p64

松陰宿泊紙屋跡

「…浦の町に至りて旅宿を求むるに皆辞す。因って直ちに葉山佐内先生の宅に至り拝謁し、其の命に因りて紙屋と

云うに宿す。…」『西遊日記』全集9巻p36



松陰宿泊紙屋跡（参加者）

松陰は、以後在平戸中、ここを宿舎とする。現在は石工屋となつて、かつての様子はわからない。家の角に「吉田松陰宿泊紙屋跡」と彫られた石碑が建てられている。私達は、松陰が通ったであろう道を通り葉山邸及び葉山佐内墓所へと歩いた。

葉山佐内旧宅跡

聖フランシスコ・サビエル記念聖堂の側を通り山道を登つていくと旧宅敷地へと着いた。あたりは鬱蒼と樹木が茂り玄関に通じる飛び石の通路は鉄条網で入れなくなっており、全く木々に隠れて建物を見ることはできなかった。松

門7号（S63・9・1）の「松陰の足跡をたずねて、平戸―長崎―熊本、折本彰氏執筆（現松風会理事）」には旧宅跡の写真（日付、88・10・14）が載せてあり、当時は近くまで立ち寄ることができたようである。是非整理をして一般公開をして欲しいと思う。

葉山佐内墓地

旧宅跡地から更に山道を500mばかり登った山中に墓



墓道を跡に山道を下り、小路を通つて港へ出た。湾の向かい側には平戸城が聳えていた。城へ行く予定ではあったが、日程的に無理があり、ここで探訪を終わりとし、帰途へとついた。参加いただいた方、指導を賜った皆様に感謝申し上げる。

文責 松風会

地があり、その一角に墓石があった。大本茂一氏の指導により墓前で納吟を行った。詩吟を学んでいる者もない者も大きい声で合吟をした。

鑑軒先生を訪う

吉田松陰

経を説き 史を論じ また 兵を談ず

着実の工夫 細評を得たり 侍座 端なくも閑話久しく



松浦資料博物館
学芸員 久家孝史氏

松陰先生と元旦

正月の過ごし方

明治5年11月9日（旧暦）改暦が発令され、同年12月3日が明治6年1月1日となった。これまでの太陰太陽暦に変わって、グレゴリオ暦（太陽暦）が採用された。松陰の時代は旧暦だから、日記など年月日が付されている場合旧暦であることを意識する必要があるのである。例えば今年は2月7日が旧暦の元旦になる。「新春を迎え……」と言う挨拶にふさわしい季節感がある。七草粥が2月13日だから、特別に栽培しなくても芹・薺・御形・繁縷・仏の座を里山で摘み取ることができる。

安政元年（1854、松陰24歳）12月3日、松陰先生は野山獄から妹千代宛に書簡を出している。この書簡は松陰の育児観・家族観・女性観を知る上で貴重な資料とされている。その文中に正月の過ごし方を妹（妹千代は兄玉家に嫁し一児の母となっている）に諭しているくだりがある。

「（略）正月には、一日どもはやぶ入り（正月と盆は主人から暇をもらって、2、3日

里へ帰ること）出来申すべくや。どうぞあに様（兄梅太郎）の御きう日（休日）をえらび参り候て、心得になる嘲ども聞き候へ。拙（私）も其の日分り候はば、昔噺なりともしたためて遣はし申すべし。又正月にはいづくにもつまらぬ遊事をするものに候間、夫れよりは何か心得になるほんなりとも読んでもらひ候へ。貝原先生（貝原益軒）の大和俗訓・家道訓などは、丸き耳（学問の深くない人）にもよくきこゆるものに候。又浄るりぼんなども心得ありてきき候へば、ずいぶん役にたつものに候。（略）」（『吉田松陰全集』第7巻280頁、『吉田松陰撰集』202頁）

正月はつまらない遊び事を止めて為になる本を読みなさいと諭しています。今日でも大いに参考にしたいものである。

新年の意義
安政2年（1855、松陰25歳）1月元旦、松陰先生は野山獄から妹千代宛に書簡を出している。

着物や道具が新しいのは気持ちの良いもので年が改まると心持ちまでも新しくなるので新年はお目出度いのであると説明している。

「（前略）目と云うは目玉の事ではない。目玉共が元旦から出たらろくな事ではあるまい。目と云うは木のめ、草のめの事ぢやない。本草のめは冬至からして、一日一日と陽気が生ずるにしたがうて、草も木も萌出づるなり。この陽気と云うものは物をそだつる氣にて、人の仁愛慈悲の心と同様に、天地にとりても人間にとりてもこのまじき氣なり。故に陽気が生じて、草も木もめでたいと思ふが御目出度いなり。夫れで新年の御目出度いも分かるではないか。前にも申す通り、一夜明けると人の氣がしゃんとして、破れ氣もきたない心も皆洗ひ揚げて、人の本心なる仁氣慈悲の心も出てくる事、てうど（丁度）草木のめの出ると同じ事ではなきか。夫れ故に新年御目出度うござります。宜しい御年を召しましたらうと云ふも、この心で考へて見れば分かる。小供の時分には人が年をとるとる云ふから、なんでもいつの間に入るやう合てんが行かざった。寝た間に取るに違ひはないが、どう云ふものやらとばかり不審に思つて居たが、今で考えて見れば夫れは眞の小ども心であった。よいと云ふは外な事ではない、やはり右の氣が

しゃんとするのがよいとしを取つたと云ふものぢや。此の考えがないと、百になつても二百になつても、一もほんとの歳はとりはよせん。夫れぢやから小供のをり、こんな子は歳をどこへ取るかよと云ふてしかられた時、とんと言訳が出来ん筈ぢやわ、取る時かほんとに取らんものを。夫れ故歳を取る事も序手にかう釈せう。歳と云ふものは、柄だ一杯へ取るから、先ず心へ歳を取れば是非善惡の分別もつかねばならず、耳へ歳を取れば是非善惡の聞分もせんねばならず、目へ歳を取れば是非善惡の見分けもせんねばならず、口へ歳を取れば是非善惡の申しわけもせんねばならず、あたまへも足へも、どこへもかしこへも、取らねばならぬこそ年なり。是れが先ず新年の御祝儀申し初めなり（後略）」

最後に「孟子は☆平旦の氣さへ賞玩す、況や新年の氣をや。賀せずして已むべけんや。」（『吉田松陰全集』第7巻322頁）と書き初めをしたので兄に文意を聞きなさいと結んでいる。

☆参照『吉田松陰全集』第3巻74・75頁、252頁、第4巻17頁、

文責 松風会

(財)松風会設立30周年記念
松陰殉節150年記念

吉田松陰日録

松陰30年の生涯を通じて日々の錬成を明らかに

頒布価格 3,000円、送本諸費200円 体裁 A5判 上製紙ケース入り 本文344頁

